

## グループエンカウンターと5分間スピーチ を取り入れた第2学年の特別教育活動

梅野 善雄 \*1

### Classroom Time with Group Encounter And Five Minutes Speech in the Sophomore Year

Yoshio UMENO

Our freshmen are arranged to composite classes that are consisted of several department. They are rearranged to each department from sophomore year to final year, so, they have to recreate their human relationship at the new class. When I took charge of a sophomore year class, I conducted several group encounters in classroom time to encourage their communication abilities, and pushed them to make five minutes speech to brush up their presentation abilities. Classroom situation was researched through the use of the psychological test "hyper QU". We shall report that several results, and discuss the method of student guidance and counseling sophomore year students through a composite class.

KEYWORDS: classroom time, group encounter, five minutes speech, sophomore year

#### 1. はじめに

本校は、機械・電気情報・制御情報・物質化学の4学科で構成されるが、第1学年のクラス編成は4学科の学生を均等に混成させた混合学級として編成されている。その理由は、自分の所属学科ばかりではなく、広く他学科の学生との交流も深めて多様な人間関係を構築してもらいたいという意図によるものである。そのため、第1学年のクラス編成にあたっては、学科の構成・男女の割合・寮生と通学生の割合・入学時の成績・推薦入学と学力入学の別などがどのクラスも均等になるよう

に編成されている。

混合学級で1年間過ごした後、2年では学科毎のクラス編成となる。学生は、入学後に構築した人間関係とは別に、自分の所属学科内の人間関係を新たに構築し直さなければならない。友達作りの苦手な学生にとっては、かなりの心理的ストレスがあるのではないかと推察される。

混合学級ではあっても、それぞれの専門学科に関する科目が2単位設定されている。学生たちは、週に1回は所属する学科ごとに分かれた授業を受けることになるが、相互交流を深めるまでにいたるとは言いがたい。異なる混合学級の学生については、同じ教室に居ても、せいぜい顔を見知って

\*1—関工業高等専門学校一般教科 (Dept. of General Education, Natinal Institute of Technology, Ichinoseki College)  
〒021-8511 岩手県一関市萩柱字高梨 E:mail:umesan@ichinoseki.ac.jp

いる程度でしかない場合が多い。したがって、第2学年で学科ごとの学級編成になる場合、担任は新生生に対する心遣いに近い心構えでクラス運営を行う必要がある。

混合学級の仕組みが始まってすでに10年以上になる。その間、著者は校務を担当していたので担任を持つことはなかったが、平成25年度に第2学年の担任となり、初めて混合学級を経た学生を担当することになった。そのため、クラス運営にあたって、学生相互のコミュニケーションや相互理解を促進させることに、特に留意するよう心がけた。具体的には、特別教育活動の時間を利用してグループエンカウンターや5分間スピーチなどの試みを行った。そして、その効果をQUにより事後評価した。本論文では、その概要を報告すると同時に、QUの結果をもとに学級の状況がどのように変化したかを分析し、混合学級後のクラス運営のあり方について考察する。

## 2. 構成的グループエンカウンター

グループエンカウンターとは、グループ内でのいろいろな話し合いを通して、相互理解や心と心の触れ合いを深めさせて心の成長を図ろうとするものである。本来はグループ内で自由な話し合いを行わせるものであるが、リーダーが話し合いの内容や時間など話し合いの仕方を制御して行うのが構成的グループエンカウンター<sup>1)</sup>(略称、SGE)である。ゲーム的な感覚で楽しみながら自然に交流が深まることから、小中高の教育現場やいろいろな社会人研修などでも広く利用されている。

SGEにおいては、エクササイズとして、いろいろなテーマでの話し合いやゲームが行われる。エクササイズの内容により、その目的や意図が異なる。単なる自己紹介的な内容もあれば、自己理解や自己受容、あるいは他者理解や他者への信頼体験など、さまざまなエクササイズがある。本来は、本音と本音の交流を通して自分の内面にいろいろな気づきを生じさせ、よりよい人間関係を構築させようとするものである。しかし、本音の交流を図らせるには、メンタル部分でのいろいろな配慮をすることが必要となり実施者(リーダー)の力量も必要であるため、完全な対応は難しい。

今回の実施にあたり、著者はSGEに関する専門的な研修を受けているわけではないため、単にゲーム的な要素を含むエクササイズを行うことで

相互の親密感をより深めさせ、自他発見などの気づきを得させることを目的とした。

具体的な実施手順は下記の通りである。毎週1時間ある特別教育活動の時間を利用して実施した。なお、このクラスは男子29名、女子10名のクラスである。グループ分けにおいて男女の構成には特に配慮はしなかった。

- 1) 座席が隣り合う者どうしで4~5人のグループを組ませる。
- 2) エクササイズの内容とやり方を説明する。
- 3) 話し合いのテーマと時間を指示し、グループ内での話し合いをさせる。
- 4) 指定時間が経ったら、別なエクササイズを行う。
- 5) 予定したエクササイズが終了したら、その感想について話し合わせる。

最後の話し合いは「シェアリング」と呼ばれ、SGEで最も重要な部分であるといわれている。ここでは、同じエクササイズを体験しながらも、いろいろな感想が出される。同じ事をしても人それぞれであり、いろいろな思いや感じ方があるということを経験する学生たちは実感することになる。

時間に余裕があるときは、シェアリングで出された意見・感想を全体の中で発表させ、その感想をクラス全体で共有するのが理想であるが、自分の意見をクラス全体に発表するには勇気がいるという学生が多いと考えられる。そこで、グループ内での話し合いの際にあらかじめ書記を決めておき、グループの中でどのような感想が出されたかを書記役の学生に発表させた。書記は自分の意見を述べるのではなく、メモした内容を読み上げるだけなので、自分の意見を述べるよりも心理的負担は少ないと考えられる。

シェアリングの内容を発表させる時間がないときは、個別に感想文を書かせて済ませる場合もあった。その場合は、主な感想を学生の氏名を伏せて取りまとめ、事後に印刷配布した。

実施したエクササイズは、「似たもの探し」「サイコロトーク」「ビンゴゲーム」「足し算トーク」などであり、SGEでは定番的な内容である。これらの内容でSGEを3回ほど実施した。これとは別に、学生相談室主催にて実施者を外部から招き、第2学年全体に対してSGEが2回実施されているので、このクラスの学生は1年間でSGEを計5回体験したことになる。

以下は、著者が実施した最初のSGEに対して

全員に書かせた感想の一部である。SGEを行うこと自体に批判的な意見・感想は皆無であった。

- 人それぞれ答えが違って面白かった。
- 普段あまり話さない人の話が聞けて良かった。
- 普段はしないような話ができ楽しかった。
- 今までそこまで話さなかった人と沢山話をするのができコミュニティ関係に深みがついた。
- 人の目を見て話せるようになりたかった。
- みんないろんなことを考えていて面白かった。

実施中は、どのグループも楽しそうに話をしており、どの学生もクラスメートと知り合いたいという気持ちで積極的に関わりを持とうとしていた。クラスが形成されてから時間の経過するにつれ、また座席を変更するごとにSGEを繰り返す中で、クラス内の交流は進んでいったように思われる。

ただし、一人だけ、クラス内で孤立している学生がいたので、その学生には事前にSGEの概要を説明して、それを行うことに支障があるかどうかを確認した。与えられた特定のテーマで話をすることには、特に問題はないとのことであった。一定の枠内であれば、孤立的な学生にも他との交流を図らせることは可能と思われる。このクラスにはいなかったが、発達障害などメンタル面で問題を抱えている学生がいる場合は、SGEの概要を説明して事前に予告しておいた方が良いと思われる。

### 3. 5分間スピーチ

次に、学生のプレゼンテーション能力の育成と、多様な学生がいることへの理解を図らせることを目的として、教室の前でクラスの皆に向かってスピーチをさせることにした。第1学年では卒研室見学<sup>2)</sup>を行っており、高学年になると卒研発表など皆の前で一人ずつ発表しなければならないことは、どの学生も学んでいる。そのこともあり、人前での発表を苦手とする学生も、自分の不得意部分を克服しようという思いで積極的に関わった。

最初から5分間スピーチを実施させることは学生の負担が大きいことから、まず1分間スピーチを2週に分けて行い、その後で期間をおいて5分間スピーチを行わせた。人前で5分間のまとまった話をするには、それなりの準備が必要である。学生はメモ書きを用意してきたり、パワーポイントにまとめてきたりするなど、クラスの皆が興味を持って聴いてくれそうな内容を準備してきて話を

しているようであった。

スピーチの内容に特に制限は設けず、自分の話したいテーマで話させた。趣味やクラブ活動のことなど、内容は千差万別であった。スピーチの仕方にも個々の個性が現れ、成績下位でも原稿無しでアドリブで笑いを取りながら5分間をこなす学生がいれば、成績上位でも顔を上げることなく原稿を読み上げる形でスピーチする者もいた。著者の印象として、そのスピーチのうまさや成績の善し悪しとは必ずしも関連しないように思われた。

以下に、学生のスピーチテーマの幾つかを、項目ごとに分類して紹介する。

趣味：モーターショー、楽しい手芸、仮面ライダー  
 音楽：イケメンと美女、邦 Rock について  
 クラブ活動：プロコン、剣道昇段審査の簡単解説  
 いろいろな蘊蓄：三国志、海苔、月の土地  
 調べてきたこと：徹夜、お年玉、牛乳、うつ病  
 その他：新南寮の説明、思い出話、冬の自由工作

特別教育活動の時間には学年全体の行事が組み込まれることもあるので、必ずしも連続する週で実施できたわけではない。基本的には、後期の6週にわたってこの5分間スピーチを行った。スピーチは、毎週7名ずつ行った。どの学生も、友達のスピーチには興味関心を持って聴いており、寝ている学生は皆無であった。途中で言葉が詰まる学生もいたが、特に茶々を入れられることもなく、むしろ、その学生を励ます方向の声が飛んだ。

以下に、5分間スピーチを終えてから書かせた学生の感想を幾つか紹介する。

- 5分間も話すので、よほど興味を引く話でないと聞き手はつまらないと思いました。自分の好きな事を話すとして、相手が興味のわからない話題だった場合でも、とりあえず自分が楽しそうに話せば、相手もそれなりに聞いてくれるだろうし、内容はおいておいても、話し方次第で何とか乗り切れるのではないかと思った。
- 正直、やる前は「面倒くさいな」とか、「そんなに長く話すことないよ」とばかり思っていました。しかし、最初の週の皆なの発表を聞いて、人のスピーチを聞くのは楽しいことだと感じ、自分も聞く人が興味を持てるようなスピーチをしたいと思いました。
- 最初の「1分間スピーチ」も合わせて、この人はこういう事をやっている、興味があるんだなど、少しだけその人のことを知れて良かったです。

- みんな聞き手が楽しくなるような話題ばかりで、とても楽しむことができました。普段、興味を持たないことについて知ることができたし、みんな、どのようなものに興味を持っているのかを知ることができて、今まで以上にクラスメイトのことを知ることができたと思います。
- このクラスがスタートして、まだまともに話したことのない人もいます。「わ、この人って実は凄く面白い人なのかな」という発見もできました。同時に、自分の発表の際には、何かしら自己アピールできたのではないかと思います。

総じて、この試みは非常に好意的にとらえられていることが分かる。普段は目立たない静かな学生が、意外な話題で大きな関心を引くなどして、学生の相互理解を深める上でも非常に有効であった。

5分間スピーチを全員に求めたことに対して、学生からの反発は全くなかった。それは、学年が上がるにつれスピーチ能力が必要になることの認識があり、1分間スピーチにより友人のスピーチは相互理解に有効であることが実感でき、そして、何よりも互いによく知り合いたいという思いが強かったためではないかと思われる。

#### 4. それ以外の特別教育活動

特別教育活動の時間には、学年共通の行事も幾つか組み込まれている。そのような共通行事の後は、文章表現や講話を聞いてまとめる力の訓練になることも意図して、長年、感想文を書かせる指導がなされている。第2学年の共通行事としては、以下のことが行われた。

- 1) 学年集会：教務主事や学生主事からのお話。
- 2) 交通安全映画会：DVDを視聴して交通安全に関する意識を高める。
- 3) サイバー犯罪防止教室：警察のサイバー犯罪防止担当者による講演。
- 4) 薬物乱用防止講演会：警察の生活安全課職員による講演。
- 5) メンタルヘルス講演会：外部講師によるメンタルヘルスに関する講演会。SGEも行われた。
- 6) 知財講演会：外部講師による知財に関する講演。
- 7) ピアカウンセリング：高等看護学校学生によるピアカウンセリング。
- 8) 連携授業：一般教科による連携授業に関する導入とまとめ。

また、担任指導として、個人面談や定期試験前の諸注意、あるいは教室掃除などの時間としても利用した。さらに、他高専を卒業後、企業経験・技科大を経て本校教員になった副担任による特別講演会も実施し、ご自身の体験談等を話してもらった。

#### 5. hyper-QUによる事後評価

学校生活における学生個々の意欲や満足度、あるいは学級内の状態を質問紙により測定する検査としてhyper-QU<sup>3)</sup>がある。この検査は、中学・高校など学級の状態を把握する調査して広く利用されている。

この調査は、第1学年の混合学級でも学生相談室主催で行われている。第2学年では、前期中間試験(6月)と後期期末試験(2月)の直前に行った。前期の調査は、高専機構の要請による全国高専の学生の心の健康に関する調査の一環として学生相談室主催で行われた。後期の調査は、その年度に行ったいろいろな試みの効果を2回のQUの結果を比較することで客観的に測定できるのではないかと考えて、著者独自で行ったものである。

QUの検査は、大きく分けると、「学校生活意欲尺度」と「学級満足度尺度」の2つの尺度で分析される。前者は、友人や先生との関係、あるいは学習意欲や進路意識に関する項目で構成される。後者は、友人や先生から承認されているかどうか、あるいはクラス内でいじめなどを受けていないかどうかという被害に関する項目で構成される。

次頁の図1、図2に学級満足度尺度の実際のデータを示した。承認得点と被害得点をそれぞれ縦軸と横軸にとり、2つの得点の全国平均の箇所を原点にとって個々の学生を配置することにより、学生を「学級生活満足群」、侵害(いじめ)を受けていると感じている「侵害行為認知群」、「学級生活不満足群」、そして、クラス内で認められていないと感じている「非承認群」の4つの群に分類する。特に、「学級生活不満足群」にある学生で、さらに教員による何らかの支援が必要とされる場合は「要支援群」に分類される(図1・2の左下の群)。

QUの検査結果は、学生個人用と教員用の2つの結果が返ってくる。教員用の結果には、上記の2つの尺度ばかりではなく、質問紙の各項目への回答や、いろいろな下位尺度の得点一覧表、並びに全国平均をもとにして各下位尺度の得点により「低」「中」「高」の3群に分けると、個々の学生は

どの位置にあるかが示されてくる。また、2回の調査は同じ質問紙で行われているので、その結果を相互比較することができる。

6月と2月の結果を比較すると、以下のことがいえる。

学級満足度尺度より、

- 1) 「学校生活不満足群」が13名から8名に減少した。
- 2) 「要支援群」が、3名から1名に減少した。
- 3) 「承認得点」の平均が30.8から32.5となり、全般に良好な方向にシフトした。
- 4) 「侵害行為認知群」は5名から10名に増加した。

学校生活意欲尺度より、

- 5) 「友人との関係」が「高」の者が、9名から15名に増加した。
- 6) 「学級との関係」が「低」の者が12名から5名に減少し、全般に学級との関係の平均が12.6から14.1となり、良好な方向にシフトした。

また、悩みについてのアンケートより、

- 7) 「悩み得点」が「16点以下」の者が、14名から22名に増加した。

以上のことから、概ねは良好な方向にシフトしたと思われるが、4)で侵害行為認知群に分類される学生が増加していることが問題である。この侵害行為認知群に分類された個々の学生を詳細に調べると、平均付近への分布であり大部分は標準偏差以内(図の点線の枠内)に収まっている。

以下に、個々の学生の状況をコメントする。

学生①は被侵害得点が特に高くなっているが、その学生は家庭内に本人では解決できない問題を抱えている学生である。クラスでは明るく元気に過ごしており交友関係にも特に問題はない。家庭内に抱えている問題の大きさが、このような心境にさせているのではないかとと思われる。

QUでは、要支援群に属する学生の指導が重要と言われている。図1・2のいずれにおいても要支援群に属する学生②は、進級が大きく危ぶまれた学生であり成績のことで保護者を含めた面談も行った。交友関係に問題はなくクラス内でも元気に振るまっていたが、成績面の不安からこの位置にいたと思われる。

図2で要支援群から外れた学生③は、メンタル部分で多少の問題を抱えていた学生である。学生相

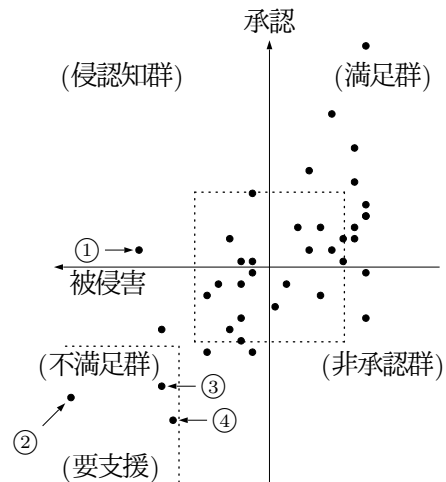


図1：学級満足度尺度(6月)

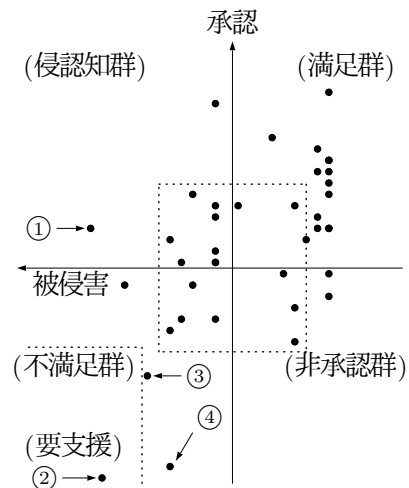


図2：学級満足度尺度(2月)

談室や保護者とも連携して対応にあたった。また、承認得点が特に低い学生④は、クラス内で孤立している学生である。個人面談では「幼少時より集団生活になじめなかった」と言っていたが、自分の意見はしっかり持って行動しており、いじめ等を受けているわけではない。

以上のようなことを勘案すると、このクラスには、特に大きな侵害を受けている学生がいるわけではないと判断される。

## 6. 考察

この1年間、学生の相互交流が図られるよう、また、同じ行為をしてもいろいろな思い・感じ方があるのだということを学生に伝えるよう心がけてきた。個々の試みの際に書かせた学生の感想を見ると、学生達も「互いにもっと知り合いたい」という思いを持っているように思われ、こちらの提

示するいろいろな試みに、特に異論を唱えることもなく素直に取り組んでくれた。

2 回目の Q U を調査するにあたり、クラス内での学生の様子などから図 2 はもっと第 1 象限に寄ってくるのではないかと期待した。図 2 に、著者が想定したほどの大きな効果は現れなかったが、前節で示したように多くの項目で良好な方向にシフトしている。本校に毎週見えられるカウンセラーに Q U の結果を見せて意見を求めると、学級全体の状況はそう簡単に変わるものではないこと、個々の学生に個別にいろいろな働きかけを行うことが重要であることを指摘された。また、全般に承認得点が上昇して要支援群が減少していることは、いろいろな試みの成果ではないかとも述べられた。

このクラスにはそれほど頻繁に面談を必要とする学生はいなかったが、もう少し個別面談の回数を増やして個々の学生への働きかけを行ってれば、なお良い結果が得られたのかもしれない。

年度末の最後の時間に、このクラスでの 1 年間の感想を書かせると、次のような感想があった。

- スピーチやグループ対話等、クラスの人が打ち解けやすい場面を先生が用意してくれたおかげで、少しだけクラスの人々の考えや興味・趣味を知ることができた。
- 一番印象に残っているのはガイダンスのことだ。グループエンカウンターを行って、近くの席の人と仲良くなれた。スピーチでは、話し手の趣味や性格が現れていて、新しい発見があった。
- スピーチやグループ内での対話は新鮮で楽しむことができた。とても良い企画だったので、またやって欲しいと思う。
- ガイダンスがとても充実していたなというのが一番印象深いです。5 分間スピーチは、それぞれの個性が現れていてとても楽しかったです。

年度末に発行される学生会誌には、個々のクラスの概要が紹介される。その中に、担任をしたクラスの学生により次のような記述があった。

先生はガイダンスの時間で私達の友情、親睦、絆を深めようと様々なレクリエーションを考えていただきました。先生にお世話して頂いたことに感謝を忘れてはなりません。

これらのことから、担任としてのいろいろな試みの意図は、学生にしっかりと伝わっていたことが分かる。ただし、クラス内で一緒に過ごす時間

が増加するにつれ、学生たちは自然に打ち解け合っていたかもしれないので、以上のことがいろいろな試みの結果得られたものかどうかは不明である。しかし、S G E により、自然な触れ合いの中ではあまり話し合われることのないテーマで話し合ったことは、相互の話し合いを深化させる上では一定の効果があったのではないかと考えたい。

## 7. まとめ

混合学級を経た第 2 学年では、学生は新たな人間関係を構築しなければならないことから、新入生同様の相互交流やクラス内の親睦を深めるための働きかけが必要と思われる。グループエンカウンターや 5 分間スピーチは、そのための教員側の働きかけとして非常に有効な手法と思われる。特別教育活動の時間に実施すれば、この時間をより有効に活用することができるであろう。

高専教員は、学問上の専門性は兼ね備えていても、学生指導や学級指導に関する専門的な研修を受けている場合は少なく、具体的な指導の方法論には疎い場合が多いと思われる。しかし、学生にスピーチをさせたり、やり方を説明してある種のゲームをさせることは、教員にとって特段の負担を生じるわけではない。単に、「やったことがない」ということへの心理的負担があるだけではないだろうか。教員が新たな試みに向けて一歩を踏み出せば、新たなクラスで、皆ともっと仲良くなりたい・知り合いたい・理解し合いたいと思っている学生たちは、自ら進んで、しかも楽しみながらその試みに参加してくれるだろう。

高専の低学年は、人間的にも大きな成長が見られる時期である。その成長を促進する教員側の働きかけとして、多くの教員が S G E や 5 分間スピーチを実施できるようになることが望まれる。

## 参考文献

- 1) 図書文化：構成的グループエンカウンター、  
[URL] <http://www.toshobunka.jp/sge/>
- 2) 梅野善雄・他 7 名との共著：一関高専における卒研室見学を取り入れたキャリア教育ガイダンス、論文集「高専教育」、第 35 号, pp.467-470 (2012)
- 3) 図書文化：教育・心理検査 hyper-QU,  
[URL] <http://www.toshobunka.co.jp/examination/hyper-qu.php>